小人

 　　Puney　Loran　Seapon

　面倒くさい。

　最近、こう思うことが増えた気がする。

　俺は。高校二年生だ。

　高校二年生にもなれば、日々の宿題が多すぎるとかなんやらで、こう思う機会も増えてくる。というか、俺は増えてきた。

「せーじ！　せーじ！」

　今も通い慣れた通学路を歩いて学校に向かってはいるものの、これが既に面倒くさい。

今は夏休み。

にも関わらず、何故俺が学校に向かっているのかと聞かれれば、それは今日が登校日だからである。補習だと思った？　ざぁんねぇんでした。俺は学校の成績はいいんだ。期末テストだって、順位は上から数えた方が早いんだよ。今回は１５０人中２０位前後だったかな。

「せーじ！　せーじ！」

　それにしても、なんで夏休みに登校日なんて何故作るのか。せっかくこっちは学校のことなんか忘れて遊び倒そうとしているのというのに……あ？　宿題？　んなもん、夏休みが始まる前に全部終わらせたわ。

　あー……ほんと面倒くさい。そして何より、

「せーじ！　せーじ！　ねぇ聞いてるのっ？　返事しろー！」

「だぁー！　うるせえ！　耳元で叫ぶな！」

　俺の肩で先程から声を張り上げている、この小人が一番面倒くさい。

　見た目は女。だって髪が長いし。体長、お世辞抜きで顔は整っている方だと思う。カテゴライズするなら、純和風といったところか。

何より目を惹くのは、その体長。頭のてっぺんからチョコンと生えているアホ毛を含めて、およそ九センチちょっと。俺の握りこぶしより少し大きい程度だ。小さくて、寧ろ目を惹くことはないとか言っちゃいけない。まさにお人形さんだ。幼稚園児にでもプレゼントしたら、さぞ喜ぶことだろう。……こんなにうるさくなければ、だが。

見れば分かると思うが、こいつは普通の人間では無い。どうやら俺以外の人間には見えていないようなので、人間かどうかも疑わしいが……まあとにかく、ここまでちんちくりんな奴など、そうは存在しないと言い切っていいだろう。

この小人の名前は『トッキー』。命名俺。小人には名前が無かったのだ。最初は『三寸法師』にしようと思ったんだが、本人が嫌がった。本人曰く、「なんかダサい」とのこと。体長的には、ちょうど『一寸法師』の三倍だから、いいと思ったんだが……まあそんなこいつも、『トッキー』が実は『ちっこい』のアナグラムになっていることに気がついていないというのは内緒だ。

「せーじ！　せーじ！　ねえってば！」

「だから俺の名前は『せーじ』じゃなくて『誠司』だ！　いい加減、ちゃんと発音しやがれっての」

　今は周りに誰もいないからいいが、もしいたら、俺はさぞかし怪しい人物に見えただろう。何せ、傍から見れば、一人で大声を出して叫んでいるのだからな。

　全く……どうしてこんなことになったのか。俺は、こいつと出会った日のことを思い出していた。

【捨て犬だと思ったら】

　あれは四月六日のことだ。今後後輩になる一年坊主どもの入学式があった日のことだったから、よく覚えている。あの日は雨がひどく、俺はイライラしながら帰路についていた。

　なんでイライラしていたかって？　そりゃ、俺の名前に『誠』の文字が入っていることについて、クラスメイトたちに「お前には似合わない文字だよな」と笑われながら突っ込まれたから……ってのもまあ無くはないが、その腹いせにクラスメイト全員の机の向きを、こっそり前後逆にするというイタズラが、なんの証拠も無いのに俺がやったとバレてしまったから、というのが一番の理由だろう。

　おかしい……俺がやったとバレないように、俺自身の机も含めて全部前後逆にしたっていうのに……何故バレた。クラスメイトの奴らときたら、「こんな地味で陰湿なイタズラをするのはお前しかいない」とか言いやがる。全く……これで俺が犯人じゃなかったら、一体どうするつもりだったのか……。

　そんな感じで、俺はこの理不尽な気持ちをどうしてやろうか、と新たなイタズラを考えながら、住宅街を歩いていた時だった。

「おにいさん、おねえさん、ひろっておくれよぅ……」

　ふと、何だか物悲しそうな、女の子の声が聞こえてきた。

　あー……これはあれか。きっと、捨て犬か何かを見つけた小学生が誰かに助けを求めているのだろう。それにしては、声が聞こえたのはかなり下の方からだった気もするが……なんてことを思って、声のした方を向いてみると、だ。

　そこにいたのは、ボロボロの衣服を着ている小人だった。

　何故か『拾って下さい』と書かれたダンボールの中にではなく、『ひろってください』と汚い字で書かれた、自身の倍くらいの大きさのプラカードを持って。

【放置プレイ】

　一瞬、自分の目を疑ったのは言うまでも無い。そりゃそうだ。小人なんて空想上の存在だと思っていたんだからな。

　正直、あんなプラカードなんて持たずとも目立つような気が……それどころか、悪い人に見世物にされる気さえする。あ、小さすぎて目立たない、とかか？

　だが不思議なことに、道を行き交う人々は、誰一人として小人に気がついている様子は無い。黙って突っ立っているならともかく、あんなに頑張って声を張り上げているのだから、そっちの方を見るなりなんなりしても良さそうだが……ここまで無反応だと、もしかしたら俺にしか見えていないのかもしれない。

　そんなことを考えた俺が、ちょっと頭が痛くなる。確かに友達はいないが、それにしたって幻覚は無いだろう……そんなに寂しかったのだろうか、と溜息を吐きたくなってしまった俺を、誰が責められようか。

「おにいさん、おにいさん、ひろっておくれよぅ！」

　先程からずっと「おにいさん、おねえさん」だったのが、ついに「おにいさん」一人だけになった。しかも、小人は俺を見ている。顔を輝かせて。

　よく見ると可愛い顔をしているじゃないか、とこの時の俺は思ったが、取り敢えず無視することにした。

　否。正確には、取り敢えず遠くから観察することにしたのだ。幻覚なら、そのうち消えてなくなるだろう。

「おにいさん、おにいさん！　まっておくれよぅ！」

　背後から聞こえてくる声を無視して、俺はその場を後にする。

　近くの電柱の陰に身を隠し、こっそり小人がいた方を覗いてみると、小人は思いの外しょげていた。どうやら追いかけてきたらしい。馬鹿だな。歩幅が全然違うんだから、追いつけるはずもなかろうに。きっと、自分が見える人間に初めて出会ったのかもしれない。

　暫くすると、小人は再びプラカードを持って、また「おにいさん、おねえさん、ひろっておくれよぅ」と声を出し始めた。だが、明らかに涙声だ。

やがて、目からポロポロと大粒――といっても、小人だから大した大きさではないが――の涙が落ち始め、その場に蹲ってしまう。

雨の中、傘もささずにあんなことをやっているのだから、上から下までグショグショだ。

そんな姿を見ていたら、俺は何だか……

やべえ、そそる。

そう思った。

【強肩】

　やがて夜になったが、小人はまだ続けていた。あれから少ししたら、健気にもまた自分が見える人を探し始めたのだ。

　だが結局、俺以外にあの小人が見える人は見つからなかったようだ。

　よく考えてみると、あのプラカードって一体なんの意味があるんだろうか。あの小人が見えないと、プラカードも見えないよな？　何というか……ちょっとマヌケだ。

　ったく、仕方がない。

「おい、チビ」

　ここまで来ると、あの小人が幻覚だ、ということを忘れてしまっており、そして不覚にも、俺は声をかけてしまった。

「お前、何して――」

「あー！　さっきのおにいさん！　さっきはよくも無視してくれたなーっ？」

「あん？　いや、まああれは――」

「これでもくらえっ！」

「うおっ？　あぶねっ！」

　この小人、さっきまで相棒だったはずのプラカードを投げつけてきやがった……！　しかも、顔まで飛んできたぞっ？　なんつー肩していやがる……！

「お前なぁ……」

「ちょーさびしかったんだからなー！　えぐっ……えぐっ……」

　たしなめようとした俺に、小人はそう叫んで俺の足をポカポカで叩く。

　叩きながら、小人は泣いていた。

　……流石にちょっと、悪いことをしたかも知れない。

「……悪かったよ」

「えぐっ……また来てくれたから、ゆるす」

「……ん」

　こんなところで回想を終えた俺は、細く息を吐く。

　結局この後、俺はこいつを家に連れて帰った。びしょ濡れだった服を交換――といっても、適当な布切れを使った即興の服だが――したり、食事――意外なことに、トッキーは人間と同じものを食べる――を与えたりしたのだが、俺の家は、小人にとって初めて見るものばかりだったらしく、滅茶苦茶はしゃいでうるさかった記憶がある。

　他の人にこいつの声が聞こえていたら、間違いなく近所迷惑だろう。

　その日以来、トッキーは俺の部屋に住み着いている、というわけだ。

「せーじ！　せーじ！」

　ちなみに俺は一人暮らしだ。アパートの部屋を借りている。

　高校生にして一人暮らし、という、響きだけで勝ち組な感じがするのだが、こいつが来たせいで一人暮らしではなくなってしまった。……あれ？　トッキーは小人だから、俺ってまだ一人暮らしか？

「せーじ！　せーじ！」

　……さっきから頭の後ろでトッキーがうるせえ。てかなんか頭が痛い。いや、頭っつーか、毛根が……

「せーじ！　せーじ！　みてみてー！」

　振り返るがトッキーはいない。こいつもしかして……

「きゃはははは！　今のもういっかーい！」

「……こうか？」

「きゃははは――きゃあっ？」

　思いっきり頭を左右にブンブンと振ると、トッキーは吹っ飛んで地面に激突する。一瞬「あれ、やばくね？」とか思ったが、トッキーは何事もなかったかのように立ち上がった。

　後で聞くと、俺の予想通り、トッキーは俺の後ろ髪にぶら下がって遊んでいたらしい。「どうして見てくれなかったのか」とプンスカ怒っていたが、そんなところ目視できるかボケェ。

　てかこいつ、見た目はちっこいが、それなりに重いんだよ。髪の毛がちょっと抜けたわ。

　おしおきとして、デコピンをかましてやった。

【土砂降り】

「……うへー、ひでー雨」

　学校も終わり、家に帰りたい俺だったのだが、今は雨が降っていた。二時間程前から降り出し始めたのだ。天気予報では、今日は傘はいらないはずなんだが……こりゃ、ひどい外れ方をしたもんだ。

一向に止む気配は無い。それどころか、だんだん強くなってきている。今はけっこうヤバいが、帰るなら、早いほうが良さそうだ。

意を決して、俺はこの土砂降りの中、丸腰で突っ込む覚悟をする。一応、制服が濡れるとあれだから、体操着に着替えた。

それにしても、夏休みなのに学校来なきゃいけないとか、せっかく来たのにこの有様だとか、一体俺が何をしたって聞きたくなる仕打ちだ。百歩譲って登校日はともかく、この雨は「お天道様仕事しろ」と言いたい。

そういえば、トッキーと初めて会ったのも、雨の日だったな。

感慨に耽っているうちに、俺は自分が住んでいるアパートにたどり着いた。……やべえ、夏なのに超寒いんだけど。

玄関で靴を脱ぎ捨てて、俺は脱衣所へと飛び込む。全てを脱ぎ去って、まとめて洗濯機の中に放り込んだ。

水と洗濯用洗剤を入れて、スイッチを入れた。

「うきゃあああ！」

「あ、やべ」

　ポケットにトッキーを入れっぱなしにしたままだったことを、完全に忘れていた。

【チョロイン】

「……あー、トッキー？」

「ふーんだ！　せーじなんて知らないもん！」

　慌てて洗濯機を止めて、中からトッキーを取り出したのだが、それからこの調子である。

　トッキーが濡れないようにしたのだが、本人の希望で、カバンの中ではなくポケットに入れていたのだ。曰く、「カバンの中は暗くて狭くて何か押しつぶされそうで超怖い」んだとか。ちなみに洗濯機に放り込まれるまで、トッキーは眠っていたらしい。

　流石に洒落にならないミスだったので、俺もこうして反省している次第である。だが、お詫びとして飴玉を一個献上しても、許してはくれないようだ。

まあ、一瞬顔が輝いたのは見逃さなかったがな。

「トッキー」

「ふーんだ。せーじの声なんか聞こえませーんだ」

「……チョコ一欠片もやるよ」

「えっ？　ほんとっ？」

「俺の声、聞こえないんじゃないのか？」

「…………」

「…………」

「……チョコくれたからゆるす！」

　やべえ、トッキー超チョロイ。

　悪いのは俺なのだが、ついついこう思ってしまった。

　ちなみに本当に許してくれた。悪い奴に騙されたりしないか、将来が少し心配になったのは言うまでもない。

【お風呂】

　で、その日の夜のことだ。トッキーが、一緒のお風呂に入りたがってきた。

　一応言っておくと、トッキーはちゃんと毎日お風呂に入っている。ただいつもは、桶にお湯を入れて、その中で体を洗ったりとかしているのだ。ちなみにたまに、お湯の変わりにホットミルクとか紅茶とか入れて、ミルク風呂だとか紅茶風呂とかにする。お前はどこぞの目○おやじかと突っ込んだが、トッキーは「おやじじゃないもん！　女の子だもん！」と、俺の突っ込みを理解しているのかいないのか微妙な反応を返してきた。

　ところで、この時お湯ではなく水とか入れておくと、大変愉快な反応をしてくれるのだが……今日はそれはおあずけだ。

　アパートの風呂なんて大して広くないものの、それはあくまで人間基準。小人のトッキーにしてみれば、充分広い。てか広すぎるレベルだ。

「きゃっきゃっきゃ♪」

　相変わらずはしゃぎまくるトッキー。しょっちゅうはしゃいでいるが、こいつは声が枯れないのだろうか……

「はしゃぐのはいいが、溺れんなよ？　助けねーぞ？」

「いや、たすけてよっ？」

　ちなみにトッキーは、いつぞやのプラカードをビート板がわりにして、バスタブの端から端までを泳いで横断しまくっていた。すごい体力である。この小さい体の、一体どこからこんな体力が出てくるのだろうか……

　そんな俺の視線を感じたのだろうか。トッキーは頬を赤く染め、泳ぐのを止めると、体を隠す仕草をする。

「せーじ？　なにジッとみつめてんのっ？　せーじのえっちー！」

「いや、お前の裸に興味はねえ」

「がーんっ？」

　そりゃ、いつも桶で風呂に入るときにトッキーは裸になっているわけだし、今更な話だ。てか体が小さすぎて、色気を感じない。

「むぅ……きょーみないのかー……せーじのベッドの下に、女の人のはだｋ」

「なんで知ってんだお前っ？　あっ！　小人だからかっ？」

　これからは隠し場所は高いところにしよう。

【くるくると】

「おら、お湯抜くぞ」

「あー、ちょっとまってー！」

　俺がそう言うと、トッキーは慌てて風呂の中にダイブする。危険だからやめなさい。

　このまま何かするのか、そう思っていたのだが……

「せーじ！　お湯ぬいて！」

「……ん？」

「新しいあそびを思いついた！　せーじ、みてて！」

　何だかよく知らんが、言われた通りにする俺。

　最初は何だかよく分からなかったが、排水口のところで小さな渦潮が発生しているのを見て、もしやと思う。

「あーれー」

　案の定、渦潮のところでトッキーがくるくる回り始める。

　……何がしたいんだ、お前。

　正直な感想がそれだった。まあ、本人が楽しければそれで……あ、排水口にはまった。

「せーじ！　せーじ！」

「……ん？」

　トッキーが焦ったように俺を呼ぶ。嫌な予感がしたものの、一応返事をする俺。

「ぬけなくなった！」

「ほんとに何がしたいんだ、お前は……」

【視線】

　トッキーの服を買うことにした。

　うちに来てから今までは、俺が布切れで服を作っていたのだが……やっぱ素人の手作りってダメだわ。すぐに糸がほつれやがる。

　そういうわけで、トッキーの新しい服を買いに来たのだ。これからだんだん寒くなっていくだろうし、そうなるとうちにある布切れで作った服じゃ寒くてヤバいだろうから、そこら辺の事情も含めている。

　とは言え服屋を探しても小人の服なんて売っているわけがないから、代わりに俺は今、おもちゃ屋にいた。ここなら、トッキーのサイズに合う服が見つかるだろうと思ったからだ。

　高校生男子が、傍から見れば一人でおもちゃ屋の人形売り場にいるのは結構あれな感じはするが、この際仕方がない。トッキーと話しながら「あれがいい」とか「いやそれはサイズが」とか話しているのも、傍から見ればブツブツと独り言っているようにしか見えないのだが、仕方ないったら仕方ないのだ。

　……さっきから定員の目が痛い。何だか見張られている気さえする。当たり前っちゃ当たり前か。

　うう……早く帰りたい。

「せーじ！　これはどうっ？」

「お前、さっきからそんなんばっかだな……」

　トッキーが選んでいるのは、さっきからお姫様が着るような、キラキラとしたドレスばかりだった。やはり小人と言えど、女の子というのは、こういうものに憧れるものなのだろうか。

　だが、これでは冬の寒さがしのげない。まあ、おもちゃの服の防寒機能がどれほどのものかは知らないが。

「もっと、街の女どもが着ているような感じにしろよな」

「んー……じゃーこれっ！」

　トッキーが選んだのは、人形に着せるにしちゃあ、少し地味すぎるものだった。確かに一般女性が着ている感じではあるが……もっと派手なのでいいんだぞ？

「なんか、せーじの作った服っぽい！」

「……地味で悪かったな」

「……？　わたし、せーじの作ったふく、きらいじゃないよ？」

「…………」

　思いがけない一言に、俺は思わず黙る。

　冬までに、絶対裁縫の技術を上げよう。そう決意した。

　こんな風に、俺の日常はトッキーのせいで大変面倒くさいことになっている。今では、学校でついうっかりトッキーと話していたせいで、クラスメイトからは変人扱いされていじられるようになってしまった。中には、可哀想な目で俺を見る人もいる。また机を前後逆にしてやろうか、このやろう。

　とは言え、まあ……面倒くさいが、悪くは無いと感じているのも確かだ。

「せーじ！　せーじ！」

　ちなみに最近出来た癖があり、裁縫の本を読んでいる時に特に多い。それが……

「せーじ！　せーじ！　くすぐったいって！」

「いや何が……って、あ。またやっちまった」

　こいつを無意識に指でいじくることだ。

「せーじ！　せーじ！」

　今日もまた、こいつの声が耳元で響き渡る。

【あとがき】

　お久しぶりです。Puney　Loran Seaponです。

　今回は二つあるので、順番に書いていきましょう。

　一つ目は小人のお話です。Ａ○ャンネルとかき○いろモザイクとかご○文はうさぎですか？　とかゆ○式とか、あんな感じの四コマ漫画っぽい雰囲気が出せたらな、と思って書いた次第です。まあ、漫画じゃなくて文章なので、限界はあったかもしれませんが……それでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

　もう一つは詩です。というか、詩のつもりで書きました。そう言えばまだ詩は書いていなかったので、挑戦してみました。ナゾナゾとか言っちゃいけない。

　では、また！